



実存主義と教育

藤 田 健 治

私は平素大学教育に携わっているものですから皆様のなさっておいでになる幼児教育については何も解らないという方が適當だと思えます。然し学生を対象とするのと幼児や児童を対象とするのとでは大変違いながらも、又教育という点で共通の面もある事は確かです。それで今日はその教育全般と私の専攻しております哲学との関係からお話を致してみたいと思えます。

さて私共が教育という仕事に携わって被教育者を取り扱っていくにます時、教育に対して強い信念をもって事に当らなければならぬのは勿論ですが、そうかといってまた私共のもっております考え、私共が自分の育った環境や自分の受けた教育から受けとり、又自分の経験を通して得た人間や社会についてもっている考えを、無理に被教育者に押しつけるというようなことは避けなければならぬと思えます。それは申すまでもないことですが、子供達にはそれぞれ個性というものがあって独自の発達をしていくものであり、それは

それなりに皆立派な人間になるというのが大切であって、教育者が自分という人間を子供に押しつけ、子供を自分と同じような人間にしてしようようなことはおかしいことだからです。然しそれならば私共は教育に携わっている間に何もそういった人間観や世界観をもたずにやっているかという点、それはそうでないようです。

例えば子供のうちには大変積極的な実地的な元氣な子供、指導性があり強い子供がおります。そういう子供はそれなりに立派になっていくように伸ばしてやることは大切であります。そうかといって自分勝手な気持で他の子供のことは余り考えずに自分の考えを押しつけ、クラスをひきまわすいわばボスの人間になっては困ります。従って他の子供との協調的な面も伸ばすように考えてやらねばなりません。或は又逆に内攻的な引込み勝な、何かというと他人を頼りたがる子供もおります。こういう子供は内面的な深さが伸びて行くようにしてやることは大切でしょうが、又多くの子供の中で交わっ

てやはり自分の正しい主張はおそれずに出来るように指導することが必要でしょう。こういう指導がどうして出来るかという点、それは教育者が暗にもっている人間像や世界像、およそ人間とはどうあるべきであり、人間の社会はどうあるべきであるかというイメージが背後にあつて、それが基になつてはじめて出来るといえるでしょう。つまり広い意味での人間像や世界像は誰でももっていますし、又それをもっていなければ教育することも実際は出来ない筈だということになります。然しこういう教育者が各自もっている人間像や世界像はそれぞれ違つておりましょうし、それが適切かどうかという点も問題になり得るでしょう。そこに人間像世界像について考へている哲学が教育になつてきます。

教育哲学は戦後の日本の教育界ではあまり問題になつていないように見えます。それは一つの反動であつて、抽象的哲学的議論よりは実際の具体的な面が大変強くなつてゐるからです。それはそれとして大変結構なことなのですが、然しそれだからといつて哲学的面が教育に必要であることは忘れるわけにはいきません。そこで今いったような意味で哲学と教育との関係を知つて頂くために、現代哲学が人間というものをどんな風に考へてゐるかを申し上げて見ようかと思ひます。その場合現代哲学で大きな潮流となつてゐる実存哲学について申し上げて見たいと思ひます。

実存哲学という言葉とならんで実存主義という言葉もあります。勿論実存主義という言葉の方が広くて、それが哲学に現われれば実

存哲学ですし、文芸に現われれば実存主義の文芸というわけです。然し実をいうと実存主義は文芸よりも哲学の方がさきでした。例えばフランスにおける実存主義の代表者としてサルトルとか女の人でボーボアルという人がおりますが、彼等は哲学の畑から出ました。ことにサルトルは大きな哲学の書物もかき、立派に哲学者としても通る人間です。そして実存主義の文芸の出る前に実存哲学は世に出ていました。ですから実存主義は本来実存哲学として生れたといつてよろしいのです。

さてその実存哲学でいう実存とは何であるかと申しますと、実存という日本の言葉は現実存在するものといふところから出たのでしようが、外国語でいへば *existence*、エクジステンスで、本来はただ存在という一般の意味の言葉でした。それを人間存在、特に個的な人間存在の意味に用いたのはデンマークの哲学者キェルケゴールでした。実存哲学はこの伝統を踏襲したわけです。ところで実存哲学の出発点は、私達二十世紀の人間はいわば皆自分を見失つてゐる。自己喪失をしてゐるということです。私達は皆大きな社会機構の中で生き仕事をしてゐるわけですが、その社会機構の中に捲き込まれて、ただ機械的に仕事をして人間らしい悦びを感じてゐない。まるで人間自身が仕事の機械が道具のようになって、仕事に追ひまわされてゐる。チャップリンにモダン・タイムズという映画があるのを御存知でしょうが、あれはこういう仕事の奴隷になつて自己喪失をした人間を諷刺しています。仕事というものは勿論人間がつく

り出したものですが、それが人間を追いまわし支配している。同じことは機械文明一般についても言えます。例えば原水爆は人間が永い間努力し建設して来た科学の生み出したものですが、それがかえって人間を支配し、人間を脅かしている。こういう体験は誰にでもあるでしょう、毎日忙しく仕事を送り迎えている。そして毎日毎日暮れていく、がそれで自分はどうなのだろう。それでいいのか、それで自分は本当に生きがいを感じているのかと自分に問うてみるといった体験です。実存哲学はこういう風にして本当の自分を見失っているのが二十世紀の人間の生活だということです。然しそれではないのです。人間はもう一度自分というものを取り戻さなければならぬ。そしてその取り戻した本当の人間と人間との関係が人間の現在の現実の生活の基本とならなければならぬ。この本当の意味での人間存在が実存とよぶものなのです。ではそういう実存、本来の人間存在はどうして得られるか。

実存哲学の最も優れた代表者であるスイスのヤスバースはそれに答えて、例えば古くから言われた「友を見出す」ということはこのような意味での実存関係であり、この関係のうちに真の人間存在があらわになると言っています。友達の発見ということはそう仰々しくいうまでもないやさしいことに見えます。然しそれは表面的な意味でそうだけなのです。本当の意味で無二の友を見出すことは決してそうたやすくはありません。東洋に「知己」という言葉があります、友達とは自分を本当に知っていてくれる人、そしてその相手にとっ

ても自分が又そうであるような関係、そうなつてはじめて第一義的な存在として人間同志が結ばれます。ペートオウエンの第九シンホニーの最後の歓喜の合唱の言葉はシラーの詩ですが、地上に於てわが魂とよび得る人をもつことの出来た人はこの歓喜の行進に加わることが出来るといっていますがヤスバースの言っているのもそういう意味のことであらうと思われます。こうして人間と人間との関係が本当に結ばれた時のあり方は、当然言葉の本来の意味で「愛」といえるでしょう。然し人間は夫々独立の人間でもありますから、やはりお互に離れた面もあり、一つにならぬ面もあるでしょう。その面をヤスバースは「戦」とよんでいます。すると人間と人間との関係は、愛しつつ戦い、戦いつつ愛していくことであるということになります。

「幼児の教育」の一月号でしたか及川先生のお書きになった農村の幼稚園のお話を私は興味深く読ませて頂きました。農村では農家は多く一つだけポツンと立っていて、近所隣りという社会生活がなく、又母親も仕事に忙しくて子供にかまっていられない。そういう社会性のない子供がそのまま園児になると、他の園児となじまないで幼稚園からいつのまにか脱けて帰ってしまう。それを先生の努力でだんだん環境になれさせ先生にもなつて来ると、こんどは先生を独占して離れない。もしこのことを例として申すなら、そういう子供に社会性をもたせてよい子供にしていくには、どこまでもその子供の気持になってその子供の人間性を眼覚めさせねばならない。その場合の教育者と被教育者との人間関係は愛の関係でしょう。然

し又その子供が他の子供を推しのけて自分だけの愛を主張する場合には私共はその子供をただ愛してばかりはいられないでひき離さなくてはならない。それは戦の關係になる。そうかといって何も愛がなくなったわけではないのだから、愛しつつ戦い、戦いつつ愛するということが人間と人間との真実な關係ということになります。

もう一つ実存主義の人間觀について申して置かねばならぬことがあります。実存主義は人間理解に於て人間を合理的にとらえていくことに決して反対しませんが、然しそれだけで人間が根本的にわり切れるという考えをとりません。人間をつきつめていくといつも最後に剰余があり、つきつめられないものがあると考えています。私共は教育に於て被教育者を出来得るかぎりはつきり知らねばなりません。そこに教育心理学や教育社会学、或は生理学や医学の面までも大切であることは申すまでもありません。然し同時に私共は人間を概念的にこうときめて、そういう風にわりきると本当の人間の核心をのがしてしまいます。例えばさきほどの友達、本当の友というものを考えてごらんになると解ります。その友達が本当の友達になるにはその性格としての特質や人間としての美点も色々あげられるでしょう。然しどんなに言い現わしてもそれで言いつくせぬよさというものがあってはじめて本当の意味での友達でしょう。人間はそういうわりきれぬものだからお互につきざる愛情の対象ともなるのでしょうし、そういう人間を対象にする教育が最後には教育者の人間という必ずしも合理化出来ない問題に当面する理由ともなるので

しょう。こういうと実存主義は不可知論や神秘主義たという誤解がおこります。然し実存哲学は人間の合理的取扱い方を決して否定しているわけではありません。むしろそれを極度におしすすめた後にはじめてわりきれないものがあるということが解るといっています。

さて以上のような本当の人間と人間との關係は社会のあらゆる場面において出て来べきものであります。然しそれが一番行われやすい場所は教育の場ではないでしょうか。教育の場において最後に事を決するものは人間と人間とのふれ合いでしょう。そこでは教育者も被教育者も本当の自分をあらわにします。又それではなくては本当の教育は出来ないでしょう。ヤスバースのいう本当の人間と人間との間の実存的關係は実は教育の場での日常の事でなければならぬはずです。然し私共も時として本当の自分を見失うこともあります。ただそれに対して教育者は普通以上に敏感であるのは教育の世界が社会の一部といわれますが必ずしも同じ利益社会ではなく或は少くともそうあってならぬことを立て前としているからだと思います。

以上が実存哲学と教育との關係についての私の私見です。私は今教育者と被教育者との間の人間關係だけについて申しました。然し被教育者相互についても実存關係はなり立つわけですし、又それになりたせざる教育やその教育方法というような問題も当然起ると思っています。私は寡聞にしてそういう試みがあることを知りません。然し教育学の關係の方々が当然お取上げになってよいもののように思われますし、私は又それを期待します。(お茶の水大文教育学部長)